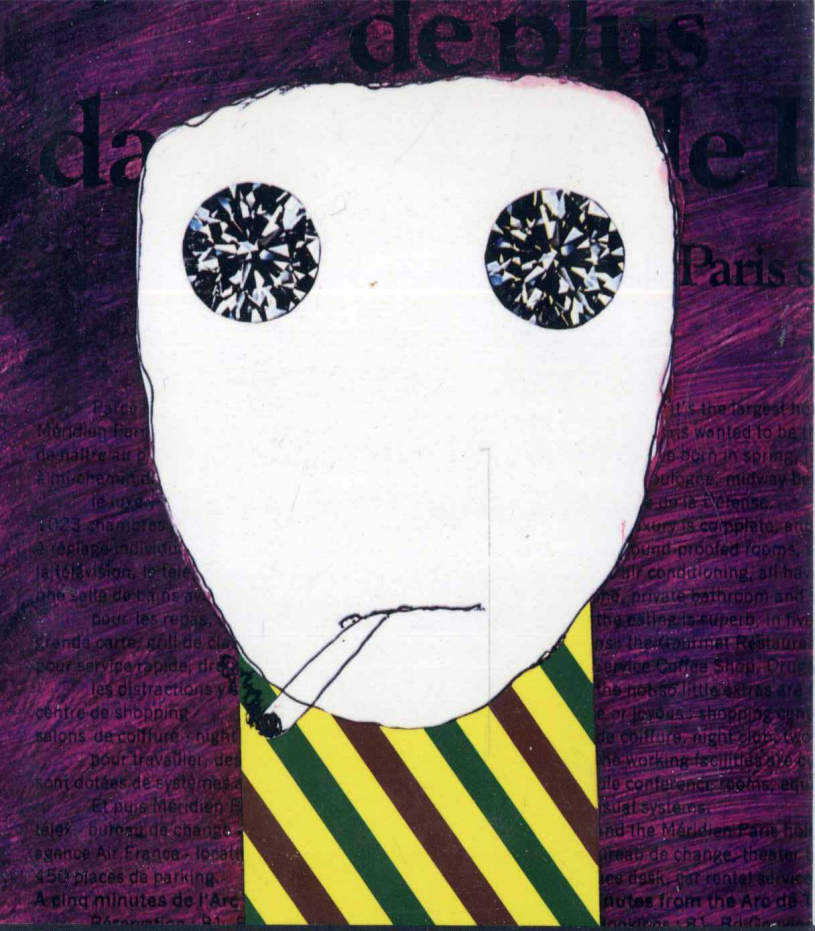

KAPPA NOVELS

長編推理小説　書下ろし

ひまつぶしの殺人

赤川次郎

KOBUNSHA

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　ひまつぶしの殺人

昭和53年11月30日　初版1刷発行
昭和57年7月15日　23刷発行
定価650円

著者　赤川次郎
発行者　大坪昌夫
印刷者　萩原崇男

東京都文京区後楽2-21-12
萩原印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替　東京6-115347
株式会社　光文社
電話　東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（榎本製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Zirō Akagawa 1978
（分）0-2-93（製）02358（出）2271（0）
Printed in Japan

長編推理小説・書下ろし

ひまつぶしの殺人

赤川次郎

カッパ・ノベルス

目次

第一章　早川家の秋　5
第二章　予期された出来事　46
第三章　秋の夜は四度狙わる　90
第四章　かくも遠き無罪　143
第五章　愛とダイヤモンド　184
解説　中島河太郎　224

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

本文のイラストレーション　守田勝治

第一章　早川家の秋

1

「水は低いほうへと流れていくもんだよ」
階段を降り切ったところで、ちょうど母がそう言うのを聞いて、圭介はまた母さんの朝の訓示が始まったな、とニンマリした。
「おはよう」
と、食堂へ入っていくと、珍しいことに、家族全員が顔を揃えている。
「こいつは驚いた！　今日は雪だぜ」
「何言ってるのさ。せっかく一家団欒のひとときなんだよ。水をさしちゃいけない」
と母の香代子がたしなめて、「ハムエッグでいいね」
いいも悪いも、もうテーブルに出して置いてあるのだ。圭介は、テーブルの中央で湯気を立てているコーヒーポットを取って、アメリカンコーヒーを特大のモーニングカップになみなみと注いだ。
「弁護士先生は、今日はどんな大悪党を弁護なさるの？」
冷やかすように訊くのは圭介の妹、美香である。パジャマの上に男物のセーターと、なんともチグハグなスタイルだが、二十四歳の若さと整った美貌で、それがむしろ小粋に映ってしまう。美人は得である。
「今日の被告は夫を毒殺した若妻でね」
と圭介はフランスパンを力をこめてちぎった。固い皮がバラバラになってテーブルに散る。
「まあ、可哀そうに！」
と美香が首を振ってみせた。
「どっちが？」
「決まってるじゃない、奥さんのほうが、よ」
と言って、少し冷めたコーヒーをソロソロと飲み始め

る。猫舌なのである。
「何かよほど事情があったんだね」
母の香代子が口を挾んだ。
「殺された亭主ってのが、ホモでしてね。結婚して五年たつのに、奥さんに手も出さない。またそれが近所にも知れわたって、奥さんは昼間は買い物にも行けなかったらしいですよ」
「離婚すればよかったのに！」
と美香は腹立たしげにカップを置いた。
「それが亭主は大会社の社長の息子、奥さんの実家はその会社の下請け企業の経営者でね。離婚して取引停止にでもなったら、潰れちまう。——で、離婚はできない、夫は男の愛人を堂々と家へ連れて来る、てな具合で、思い余って、砒素を亭主のコーヒーへ……」
「やれやれ」
香代子がため息をついた。「昔は亭主に苦労させられるといやあ、酒とバクチと女しかなかったけど、今は変わったもんだねえ」
「砒素で殺すなんて生温いわ」
美香がクロワッサンをギュッとねじ切って、
「私なら、亭主のナニをチョン切ってやるわ」
「理由はどうあれ、殺人は殺人だよ」
断固たる口調で口を出したのは、末弟の正実である。
「厳罰に処すべきだ！」
もうとっくに食べ終わって、皿は猫もなめようがないほどきれいになっている。きちんと背広を着込み、ノリのきいたワイシャツが白く目にまぶしいようだ。本人のほうもノリがきいているのか、ピンと背筋をのばして、椅子に腰かけても背もたれにもたれようともしない。
美香が反論して、
「だいたい、そういう亭主のほうを死刑にするべきなのよ。あんた、奥さんに同情しないの？」
「姉さん、法は法だからね。個人的な感情を混じえていたら、社会正義は守れない」
「石頭！」
と美香がゆで卵の殻をカップの縁で叩き割った。
「おれに言わせれば、その女は馬鹿だ」
「何が馬鹿なのよ、兄さん」
美香がキッとなって、長兄の克巳を見た。黙々と冷たいミルクを飲んでいた克巳は、軽く口を拭うと、

「どうせ殺すなら、捕まらないように殺せばいい。捕まる奴は馬鹿だ」
「それじゃ何か？　兄さんは、捕まりさえしなきゃ人を殺してもいいって言うのか？」
と正実がかみついた。
「そうとも。おれたちは誰だって知らないうちに人を殺しているんだ。正実、おまえだってそうだ」
「僕が？」
「たとえば、おまえが通りかかった人に道を訊いたとする。そいつがおまえと別れた後、車にはねられて死んだら、どうだ？　おまえが呼び止めたばっかりにそいつは死んだんだ。間接的な殺人じゃないか」
「そ、それは話が違うじゃないか！　インチキだ！」
正実が声を荒げる。すぐカッとなる性質なのである。
「ま、まあまあ……喧嘩はよそうよ」
圭介は慌てて割って入った。「弁護ったって、僕が弁護するわけじゃないんだ。まだ駆け出しだからね、先生の隣りに座ってるだけなのさ」
「だけど——」
と不満そうな正実を抑えて、圭介は、
「ところで、さっきの母さんの話、何だったの？」
と話題を変えた。
「何のことだい？」
と面食らった顔の香代子へ、
「ほら、『水が流れて』どうとかこうとか言ってたじゃないの」
母の代わりに、美香が、
「これよ」
と新聞を差し出す。「石油王の帰国！」
「石油王？」
と新聞の見出しを眺める。
〈石油王帰国！——世界有数のダイヤ・コレクションを携え〉という見出しに、空港ロビーらしい所で、報道陣に取り囲まれた、色黒な初老の男の写真が出ている。
「橘源一郎よ。ねえ、なかなかのロマンスグレーだと思わない？」
美香がいやに熱心に圭介のほうへ身を乗り出す。「ロールス・ロイスを三台持ってるのよ！　それに身の囲りの世話をする女性を五人連れて来てるんですって」
「何の世話か、分かるもんか」

と圭介は新聞をテーブルへ置いた。
橘源一郎のことは、もちろん圭介だって知っていた。〈幻の石油王〉〈謎に包まれたその過去〉〈邸宅はさながらハレムのごとく……〉といった記事が、女性週刊誌を賑わしたのはもう五年も前のことだろうか。
中東の某国に忽然と現われ、大油田を開発して一挙に大富豪にのし上がった「タチバナ」とは何者なのか、日本のマスコミ界は、その貪欲なまでの取材力を結集して調査したが、ついにはっきりとした輪郭はつかめずじまいであった。
分かったことといえば、橘源一郎という日本人で――これも偽名でないという保証はない――年齢は五十代の後半であるということ。独身で、その大邸宅にほとんど籠もりきりであること。財力にものを言わせて、世界じゅうから有名なダイヤモンドを蒐集していること……。
「ダイヤのコレクションは、いったいいくらぐらいの値打ちか、見当もつけられないようよ。凄いわあ！」
美香がお祈りでもするように、両手を合わせて叫んだ。
「やれやれ……」
圭介はチラリと腕時計を見た。まだ大丈夫だな。「でも、どうして石油の話が水の話になったのさ？」
「私が言ったのはね」
と香代子は皿に残った卵をパンでこすり取りながら、「水が低いほうへ流れるように、お金も貧しい者のほうへと流れていくべきだってことさ」
「現実はその逆だな」
と克巳が冷ややかに言った。「金は高みへと集まるんだよ。ニュートンには申し訳ないが」
香代子は天井を指さして、
「このマンションだって、水は屋上のタンクにいったん貯めこまれてるよ。だけどね、それは下の各部屋へ水を供給するためなんだ」
「どういう意味なの、母さん？」
圭介は、まだよく話が呑み込めなかった。「奴がどこかに寄付でもするのかい？」
「まさか！　あの手の成金がそんなことをするもんか」
と、克巳が吐き捨てるように言って、ミルクを飲みほした。
「べつにどうって話じゃないよ」
と香代子は手を振って、「ただ一部の金持ちばかりが

恵まれて、ウチのような貧乏人には不公平なことだって意味さ」
「ウチはそんなに貧乏かい？」
「今でこそ、みんなが立派な大人になって働いてくれるから、こんなマンション住まいもできるけど、お父さんが亡くなってからの何年かは……。ま、こんな話はよそう」
圭介の顔に、どことなく不安の影が射した。
「そんな成金って奴は、まったく鼻持ちならん」
克巳は初めて表情に嫌悪の様子を見せた。めったに感情を顔に出さない性質なのだ。
「そんな奴は生きている値打ちがない。さっさと死刑にして、財産は貧しい施設にでも分配すべきだ」
「兄さん！」
また正実がカッとして、「兄さんはアナキストなのか！」
「よせよ、アナキストの何たるかも分からんくせに」
「しかし、社会秩序は守られるべきだ！　たとえ不公平はあっても、私有財産の保護は社会の根幹で……」
「正実」
香代子が遮って、「もう時間じゃないの」
「は、はい」
正実はそそくさと席を立つ。「行って来ます」
「気を付けてね」
食堂を出ようとする正実へ、克巳が言った。
「偉大な犯罪者たちによろしくな」
正実はキッと振り返って何か言いかけたが、言っても無駄と諦めたのか、そのまま足早に出て行った。
やがて玄関のドアが開く音がしたかと思うと、ドタドタッと何かが倒れる音。
「――またやったな」
と克巳が苦笑い。ドアが閉まると、ほとんど走るような足音が廊下を遠ざかって、たちまち消えてしまう。
「ちゃんと靴をはき終えてから玄関を出ればつまずいて転ぶこともないのにね」
と香代子がため息をつく。「いつも言ってるんだけど」
「よくまあ、あんなに忙しくしてられるわね」
と美香がのんびりサラダを突つく。
「仕方ないさ。刑事ってのは、そういう商売なんだ」
圭介は取りなすように言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

「まあ、あの子には向いてるんだろうねえ」
「融通のきかんコチコチ、正義感の固まりだからな。まったく苛々するよ」
「まあそう言うもんじゃないよ、克巳。あれはあれでいいところもあるんだから」
「正義感っていえば、圭介兄さんだって、そうでしょう？」
美香がほこ先を圭介のほうへ向けた。長兄の克巳はただ「お兄さん」、圭介のことは「圭介兄さん」と呼んでいるのだ。
「何が？」
「弁護士も刑事も、正義のために戦ってるわけよね」
「馬鹿らしい！」
克巳が頭を振った。「ペリイ・メイスンじゃあるまいし、弁護士と刑事なんて、ティシュペーパーと百科事典みたいなもんだ。同じ紙でも、その存在理由はまったく違う」
「あんなこと言ってるわよ、圭介兄さん。黙ってていいの？」
圭介は答えずに、笑ってコーヒーを飲んだ。
「でも、そういえば圭介は医者になりたがってたわねえ」
香代子が言った。「まさか弁護士になるなんて、思ってもみなかったよ」
「ほんと。どうしてお医者さんにならなかったの？」
圭介は肩をすくめた。——呑気なこと言って！　いったい誰のせいで医者への道を諦めたと思ってるんだ。
「——さて、そろそろ出かけるよ」
「出勤時間の決まってる人って大変ね」
美香が同情に堪えない、といった口調で、「私だったら気が狂っちゃう」
「大部分の人間はそうなんだぞ」
美香はインテリア・デザイナーで、オフィスも持ってはいるが、めったに朝から出ることはない。注文のあったとき、その相手の家を直接訪ねていくことが多いのである。
「私は怠け者なのよ。——そのうち、大金持ちと結婚して、遊んで暮らすの」
「石油成金みたいな？」
「そう！」

美香は力強く肯いた。「素敵じゃないの、あのダイヤのコレクション！　あれをくれたら、あの橘って人と結婚してもいいわ」
「馬鹿らしい！」
と克巳が呟く。
「お兄さんって、ニヒリストなのね」
「金持ちってのを知ってるだけさ。連中がいかにケチで、非情で、恥知らずな奴らか、ね」
「あら、あの人はとっても優雅な紳士だそうよ」
「優雅な紳士か……」
「じゃ、出かけるよ」
圭介は席を立った。背広を着て書類の入ったアタッシェケースを手に玄関へ出ようとしたとき、廊下の電話が鳴った。ちょうど手近だ。
「はい、早川です」
「古美術協会の中谷ですが……」
渋い、ドスの利いた声がする。
「母ですね？　ちょっとお待ちを」
圭介は受話器を手にしたまま、「母さん、電話だよ」と食堂のほうへ声をかけた。香代子が、ヨッコラショという感じで現われる。
「中谷さん」
「ああ、ありがとう」
「じゃ行ってくる」
「行っといで」
圭介は手早く靴をはいて、玄関を出た。ドアを閉じかけて、わずかに隙間を残したところで手を止める。
「……そう、大変な掘出し物だよ」
香代子の声が洩れ聞こえてくる。「ぜひ、協会のメンバー全員に集まってもらっておくれ。一人も欠けないように、いいね？——詳しいことはその時に」
「やあ、早川さん」
急に声をかけられ、圭介はギクリとして、ドアを閉じた。
「おはようございます」
隣りの部屋に住む、角田という自動車のセールスマンである。
「お、おはようございます」
圭介は笑顔を作った。
「ご一緒にどうです？　車で送りますよ」

「それはどうも」
角田は三十代の半ば。並みの月給では、とてもこんなマンションには住めないが、セールスにかけては凄腕で、歩合給を加えると、重役クラスを凌ぐ収入と言われている。きちんと背広にネクタイは当然だが、不思議なことに、あまり上等でない背広を着ているのだ。
エレベーターで地下の駐車場へ降りる途中、圭介はそのことを訊いてみた。
「角田さんなら、英国製のスーツぐらい着ててもよさそうなのに」
角田は微笑んだ。職業柄ソツのない、というか、人に警戒心を起こさせない、抵抗のない笑顔である。
「早川さん、私が車を売って回る相手は、決して金持ちばかりじゃありません。いや、むしろ長期分割にしても何とか買いたいという方がほとんどです。そんな家へ、フィンテックスのスーツ、テストニの靴、ディオールのネクタイでお邪魔したら反感を持たれるばかりですよ」
「なるほど」
持てないというのと、持たないというのはだいぶ違うんだな、と圭介は感心した。
駐車場に着くと、圭介は目を丸くした。
「角田さん、この車は……」
「新型のポルシェですよ。いかがです?」
「でも——」
角田はドアを開けながら、圭介の思いを察して、
「もちろんセールスに回るのは自社の車です。でも、通勤にまで、それに縛られることはない」
「はあ」
超モダンなシートに夢見心地で身を委ねる。
「それにね」
角田は車をスタートさせながら言った。「私はウチの車のデザインが気に入らないんです」

2

「——ここでいいわ。ありがとう」
克巳が車を路肩へ寄せて停めると、美香は車を降りた。
「じゃ」
克巳は軽く肯き返した。妹の姿が、地下への連絡通路に消えると、ゆっくり車を走らせる。

新宿駅西口広場。すでに十一時を回っている。普通の勤め人なら、仕事の手を休めて、昼はまだかな、と腕時計をチラリと眺めるころだ。克巳は立ち並ぶ超高層ビルの谷間を、ゆっくり走らせた。それもはなはだ奇妙なことだが、クネクネと曲がり、ときには右へ、左へ折れながら、けっきょく同じ所をまた走っているのである。しかも、その奇妙な儀式は二度、三度とくり返された……。

早川克巳は三十六歳である。背はさほど高いほうではないが、胸の厚い、がっしりした体つきであった。よく陽焼けした顔は、やや顎が張って、いかつく、無愛想な感じである。しかし、ただ逞しいだけの男でないのは、細い目にきざす、どことなく陰を帯びた冷たさを見ればよく分かる。

克巳は、少年時代、大変な腕白坊主だった。それがガラリと内向的な性格に変わったのは、やはり父の死以来のことだった。克巳は十三歳で、まだ正実は香代子の胎内に宿ったばかりのときであった。

香代子の夫、早川哲郎は大型タンカーの船長として、人望もあり、収入もよかった。ただ仕事柄、家にいるのは一年のうち、合計してもひと月ほどだったので、今では克巳でさえはっきりとその顔を思い出せない。弟や妹はなおさらのことだ。突然の死はインド洋上で訪れた。貨物船が炎上し、沈没したのだ。生存者はごくわずかだった。香代子が生存者の収容された地へ飛んで行ったが、夫の姿はなく、船とともに海底へ消えたことが分かった。しかし、後になって、この事故が、実は荷主が保険金目当てに起こした計画的なものであったことが明らかになり、事態は一変した。計画に加わった船員が、船長も仲間だったと供述したことで、早川家への世間の風向きは冷たくなり、会社も遺族への保障金の支払いを拒んだのだ。香代子は生まれたばかりの正実を含め四人の子供をかかえて、世間の風当たりに対抗した。

奇妙なことに、証言をした船員はその後、どこへともなく姿を消し、十年近くたったある日、突然に父の名誉は回復した。船員の証言は、自分の罪を軽くしたいがためのデッチ上げだったと分かったのである。それにしても、なぜそれが分かったのか、船員はどこへ消えたのか、すべては曖昧なままに終わって、何か裏に大物が動いているらしいという噂だけがしばらく残っていた。

さまざまな職業を転々として、四人の子供を育てた香

代子は、十年たって、保障金を払いたいと訪れて来た会社の役員を叩き出した。
克巳は、そんな激しい浮沈の中で、母に最も近く、その苦労を見て成長してきた……。
今、克巳はフリーのルポ・ライターということになっている。半月も家でぶらぶらしているかと思うと、急に旅行へ出て、ひと月以上帰らないこともある。香代子も呆れて、
「そんな妙な商売があるのかね」
と首を振るばかりだった。
ひまな時間が多いわりにはいい収入があり、末弟の正実などは、やっかみ半分、もっとまともな職を捜せと、いつも意見している。
克巳はそんなときは、ただ笑うだけだった……。
タクシーでも待っているように、歩道の縁に立っている男に気づいて、克巳はわずかに車のスピードを落とした。この辺にはいくらも見かける若いビジネスマン風の、アタッシェケースを提げた男だ。
その男は克巳の車には目もくれず、あたりを眺め回している。克巳の車が目の前を通り過ぎるとき、男はハンカチを取り出して口を拭った。克巳は再び車のスピードを上げると、超高層ビルの谷間をもう一度巡った後、同じ場所へ戻ってきた。
男はまだ立っている。克巳は車を歩道へ寄せた。車が停まらないうちに、男は素早く乗り込んで来て、助手席へ腰を落とす。車はそのままビルの谷間を抜けて、今度は戻ろうとしなかった。
「場所は？」
と克巳が訊いた。
「赤坂だ。赤坂見附の交叉点に出てくれ。後は説明する」
アタッシェケースを膝に載せて、男が答えた。
男は腕時計を見て、「ちょっと急いでくれ。ウチの社長は五分刻みのスケジュールだからな」
「大丈夫。間に合うさ」
克巳はぶっきらぼうに請けあって、「五分で話がすむのか？」
「すまないと昼食を食べそこなうからね。社長は昼食はいつも決まった店で取ることにしているんだ」
克巳は苦笑した。殺人の相談をした後で、よく昼食が喉を通るもんだ……。

「おはよう」
オフィスへ入ると、美香はにこやかに微笑んで言った。
「おはようございます」
受付のデスクから顔を上げたのは河野恭子——〈インテリア・美香〉のただ一人の社員だ。といっても、美香よりずっと年上で、たぶん三十代の初めだろう、細身で、きびきびした動きが美しい、秘書タイプの女性である。きつい顔立ちながら、なかなか目立つ容貌には、ほとんど化粧っ気がない。
「何か電話はあって？」
美香は奥のモダンなデスクに軽く腰をかけて、タバコに火をつけた。濃紺のワンピースに象牙のブローチ。シックな装いである。とても二十四歳には見えない。あまり若く見せるのは、インテリア・デザインを依頼しに来る客に、かえって不安を与えることになる。
「とてもよくお似合いですわ、お嬢さん」
河野恭子がため息をついた。いつも美香のことを「お嬢さん」と呼んでいる。
「ありがとう、恭子さん」
「あ——電話ですが、川崎の倉本様、府中の伊藤様から、請求書を送ってほしいと言って来られました。お二人とも、すっかり出来栄えに満足しているとお伝えするように、おっしゃってましたわ」
「そう。伊藤さんのほうは私に下心があるのよ。一度夕食にご招待って言ってなかった？」
「ええ、ぜひお招きしたい、と……」
「ほら、ごらんなさい。ほかには？」
「お一人、青山の花岡様のご紹介で、金子様という方がぜひデザインをお願いしたい、と……」
「そう」
肯いて、美香はしばし視線を宙に遊ばせていたが、やがて恭子のほうへ笑顔を向けて、「私ね、恭子さん、ちょっと旅行に出ようかと思ってるの」
「まあ、どちらのほうへ？」
「まだ決めてないんだけど」
「いい季節ですものね」
「そうね。——その日程次第では、その金子っていう方にも、ちょっと待っていただくことになるかもしれないわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl